校長室だより～燦燦～ №３９

英語の恩人

2020.1.14

恩師と教え子という言葉がある。皆さんは小学校１年生から高校３年生までの担任の先生の名前を言えるだろうか。恩師の名前を覚えているだろうか。

私の中学３年間は毎年担任の先生が替わった。中学３年生になると、英語の先生が担任の先生になった。中学２年生の２月までは、特別家で勉強することもなく、成績も特段困ることもなかった。ところが中学２年生の３月になり、我が人生に激震が走った。２月に実施した「新教研テスト」の結果が返ってきた。国語、社会、数学、理科まではいい。問題は英語だった。他の４教科に比べて偏差値が極端にわるかった。愕然とした。途方に暮れた。「これから３年生になるというのに」

それまでは自分の英語がそんなにわるいとは思わなかった。なぜなら、学校の成績はわるくなかったからである。結局私の学年全体の英語が低かったのである。新教研テストという対外テストの結果を見て初めて本当の英語の成績を知ったのである。

当時の新教研テストは、得点、偏差値、学級順位、学年順位、県北地区内順位、県内順位、志望校別順位などすべてわかった。完璧なデータである。自分の成績を見て「このままでは志望校に入れない」中学２年生の３月になって初めて焦った。かといって、相手は英語である。どこからどのように手をつけていいのかわからなかった。大きな不安を抱えたまま３年生になった。

そこへ救世主が現れた。新しい英語の先生である。加えて担任にもなった。Ｓ先生である。Ｓ先生が、私たちの学年の英語の成績を見て驚いたということを話していた。あまりにもわるくてである。Ｓ先生も途方に暮れたらしい。期限は１年しかない。高校入試は待ってはくれない。

私はＳ先生のことが好きだったわけではない。だが、英語の授業はＳ先生に言われるままにやるべきことは確実にやっていった。特別自分で努力した覚えはない。がんばった記憶もない。Ｓ先生に言われたことしかやっていない。にもかかわらず、英語の成績は上がっていった。毎月実施される新教研テストの英語の結果も上がっていった。

英語の成績は見事に上昇カーブを描いた。そして３学期の英語の定期テストでは、ついに１００点を取った。うれしかった。だが、Ｓ先生には褒められなかった。Ｓ先生は１問、できないだろうという問題を入れておいたそうである。それができてしまったようだった。１００点は取れない問題のはずだったらしい。

Ｓ先生は英語の先生なのだが、数学もできた。共通一次テスト（現大学入試センター試験）の数学の問題を毎年解いていると言っていた。今年も満点だったと自慢していた。その頃は、ちょっとかわった先生だなと思っていた。しかし、自分が教員になり、Ｓ先生のすごさがわかってきた。Ｓ先生は、毎年自己研鑽に励んでいたのだと思う。だから、どん底状態の私たちの英語力をたった１年でジャンプアップさせることができたのだろうと思う。中学生の頃からずっと志望校に合格できたのはＳ先生のおかげだと感謝している。後で振り返ってみるとＳ先生は“魔法使い”のようだったと思う。

Ｓ先生に出会っていなかったら、Ｓ先生が中学３年生というタイミングで現れてくれなかったらと思うと、背筋が凍り付く。人生が変わっていたかもしれない。Ｓ先生は私にとってただの恩師ではない。「恩人」である。皆さんの恩師の中にも、「この人のおかげで今がある」という恩人と言える方はいらっしゃるだろうか。